

鯉淵学園の思い出

今回の鯉淵学園の思い出は、加藤 整さん（10 期卒）が福井県の村上利夫さん（研究 11 期卒）との交友について書いてくださいました。

村上利夫さんのこと

私は昭和 30 年 3 月に本科を卒業したあと、研究科（鞍田純先生の推広研究室）に残りました。そこに同じく研究生として村上利夫さん（福井県職員）が来られたのです。

鞍田先生はこの村上さんに、日本の農業は水田だけではない、水田地帯から来た君は畑作を勉強するとよい。そして農政を学ぶためには歴史的考察が必要だと言われたそうです。こうして村上さんの研究テーマは、「畑作農業の展開過程」と決まり、鹿島郡舟木村



（現銚田市）に於ける大規模畑作経営（波東農場、明治 13 年～同 29 年）の消長過程を中心に、歴史的資料の検証や現地調査（これには農業経済の特研生が当たりました）によってこれを明らかにされました。その結果は農業経済学界でも画期的な成果でした。ところが村上さんのこの研究論文は、鞍田先生に報告提出されたあと行方不明になってしまい、世に出ることはなかったのです。

一年後、福井県庁に復帰された村上さんは確実に実績を上げられ、昭和 46 年には『実践 農業指導論』（A5 判 334 頁）を出版、この中で村上さんは農業指導とはいわば人づくりである、として「教育的農業指導」の重要性を強調されています。私はこれを読んで大いに共鳴し、当時中央会で担当していた長期講習で特別講義をお願いしました。

その後、村上さんは県立農業短期大学教授、農林水産部長等の要職を歴任され、県議会議員、農業会議会長を経て、平成 12 年から 20 年まで福井県小浜市長を務められました。この間、全国初の「食のまちづくり条例」を制定、その経緯は 2009 年に出版された『緑が生きる—次代を育むまちづくりの実践—』（B6 判、289 頁）に詳しく述べられています。

さて、この 60 年余の間、村上さんとの交友は断続的に続いていましたが、『緑が生きる』を読んで行方不明になっていた研究論文の下書き原稿の一部（第 2 章 波東農場史）部分）が出てきたらしいことを知りました。

そしてこれは放置しておく訳にはいかないと、早速連絡してその下書き原稿を送ってもらい、整理して村

上さんの自費出版として一冊にまとめたのです。これが『明治期・波東農場史—茨城県における一大農経営の消長—』（A5 判、120 頁、2010 年 6 月）です。そしてその秋には、昭和 30 年の現地調査で大変お世話になった秋山将氏等にお礼とご報告に伺い、60 年振りに宿願を果たすことが出来たのです。帰りの車の中で、二人で“農学談義”をやろうと約束したのですが、まだ実現していません。（加藤 整 10 期卒）

頑張っています！同窓生

中嶋則子さん（15 期卒）から原稿を送っていただきましたので掲載させていただきました。

「頑張っています！同窓生」は、岩本佐知子さん（20 期卒）、田中義治さん（23 期卒）、関口恵土さん（25 期卒）を取材させていただきました。

お手玉で人生に笑顔を

～温もりを届けよう、手から心へ～

昨年 9 月に後期高齢者医療被保険者証が届き、退職して早 15 年が過ぎました。40 年間、兵庫県生活改良普及員として地域や農家と接する現場活動の中で、常に気にしていたことは「農家のお母さんたちがただ黙々と働くばかりでなく、これからの人生の中で一時でも心の底から笑ってほしい」ということでした。



この思いの実現を定年退職の 1 年前より模索しておりました。60 歳の定年を控えた私にとって「第二の人生は地域のために貢献したい」というとても強い思いでした。

「たかがお手玉 されどお手玉」と人は昔からお手玉を女の子の遊びだと言ってきましたが、お手玉の奥深さには驚くばかりです。お手玉は日本人の生活の中から生まれ受け継がれた文化です。

「心と体の健康づくり」「努力が報われる達成感」どれも時代を超えて人々に届くものだと言うことをあの 40 g の小さな玉から教えられました。但馬にも多くのファンが増え、県・近畿・全国大会等にも参加し、多くの仲間の輪が広がっています。

この年齢になるまで、但馬、県内、近畿、全国とお手玉の普及に走り回り、今ではお手玉のおばさんになって

しまいました。どこに行っても、「下手で落ちて笑う、上手に出来ても笑う」というこの笑いを私は求めていたと思います。「歌いながらお手玉で遊ぶと、だれでも嫌なことを忘れられる」が私の持論です。



カラフルなお手玉

昨年10月29日のNHKの「ためしてガッテン」で、お手玉で目や手を動かすと、脳が活性化して心の安定をもたらすほか、認知症の予防にも役立つということが放送され、多くの県職のOBの方からもお電話やお手紙等をいただきました。ある日、

列車に乗ったとき、小さな子供の前に座り、お手玉の技を披露したことがありました。すると子供の目が見る見る輝き小さな交流が生まれました。

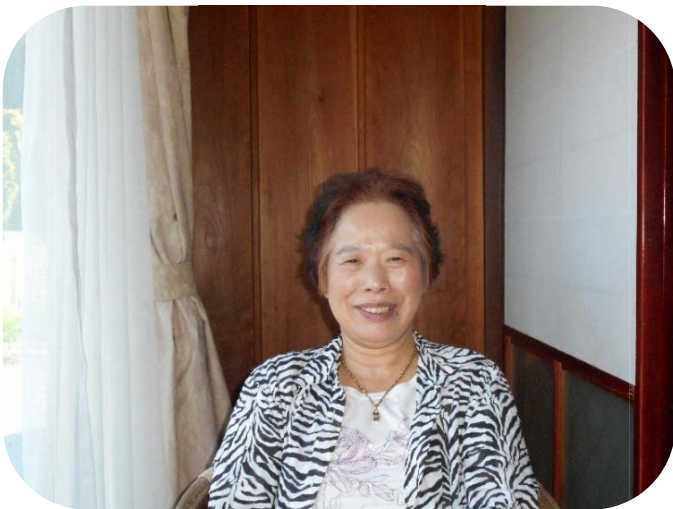
昨年7月から港地区公民館を会場に豊岡市立港東小学校の生徒を対象にした「土曜チャレンジ教室」が始まりました。その教室の一つに「お手玉教室」があり、月1回、地域の先生として生徒たちにお手玉の楽しみ方を教えています。

このようにお手玉は、子供から高齢者まで楽しめる遊びであり、自分が生きていることを確かめ、人生を楽しむ術となり得るものです。だから、女性はもちろんのこと、男性にもお勧めしたいと思っています。

これからも体力の続く限り、高齢者や認定保育園児、小学校の生徒たちとお手玉を通して一緒に笑っていきたいです。皆さんも一度お手玉を握ってみてはいかがでしょうか!! (中嶋則子 15期卒)

児童に読書の大切さを教えたい

岩本佐知子さん (20期卒)



笑顔が素敵な岩本さん

暦の上では秋分が過ぎたとは言え、気温30度を超え夏日を思わせるほど暑い9月27日、豊岡市吉井にお住

まいの岩本佐知子さん(20期卒)をお訪ねいたしました。彼岸花が燃えるように咲き誇る県道713号線を通り、コウノトリ但馬空港を見ながら車を走らせ、岩本さんがお住まいの吉井地区に近づくと、県道242号線沿いの畑で市立奈佐小学校の児童たちがサツマイモ掘りをしていました。集落に入ろうと車のハンドルを切ったとき、沿道に停車していた車から警笛が鳴りました。岩本さんが私を待っていただいたようで、岩本さんの車に誘導されご自宅まで行きました。取材が始まる前に、岩本さんから美味しい抹茶をご馳走になりました。趣味で茶道を習得されていたとお聞きして驚きました。

黒瀬喜多さん(元秋田県大潟村村長)とは同期で友人

岩本さんは昭和38年、鯉淵学園(農村生活科)に入学されました。入学された動機は「4人姉妹の長女だったので家業の農業を継ぐつもりで鯉淵に入学した」と話されていました。学生時代の恩師のことをお聞きすると「鞍田学園長が恩師であり、その学園長の娘さんの黒瀬喜多さん(前秋田県大潟村村長)とは同期で仲がよく、同じ演劇部であったことから鞍田先生の自宅によく遊びにいき、食事やお菓子を食べたり色々な話を聞かせていただいたことが嬉しかった」と笑顔で話されていました。鞍田学園長からは多くのことを学んだが、その中で最も印象深く心に残っていることは「電気製品は便利なものであるが、使用しなくてもそれを持っていることがステータスシンボルであると言われた」と当時のことを懐かしく話されていました。

演劇部の楽しい思い出

当時の演劇部は、夜10時という門限に厳しさがなく、深夜まで演劇部の活動をしていたそうです。また岩本さんが2年生だった昭和39年、東京オリンピックが開催され、その最終日の10月24日にマラソンがラジオ中継されていたそうです。その時、岩本さんたち演劇部員は、ラジオ中継を聞きながら舞台道具の木や岩を作っていて、日本代表で出場していた円谷選手がゴール間際で他国の選手に抜かれ、惜しくも三位でゴールしたシーンを今でも目に浮かぶそうです。岩本さんは学生時代を振り返り「釜で焼いたアンパンの美味しかったことなど思い出は沢山あります。卒業後は農業をするつもりでいたので、熱心に勉強しなかった。しかし、良き友人に巡り合い青春を謳歌した幸せな2年間でした」と話されています。

学生時代に知った読書の大切さ

そんな岩本さんですが、卒業の前年10月になって、将来のことを真剣に考えるようになり、農業経営等を教科書で勉強したものの、家業の農業には自分は向いていないと気づき、生活改良普及員になることを決心されたそうです。その後、まず栃木県的生活改良普及員資格を取得して、次に地元兵庫県の生活改良普及員資格を取ったそうです。「この時ほど本を読むことの大切さを知っ

たことはない。この時の経験が今に生きている」と話されていました。

良い人たちに恵まれた普及員時代

昭和40年3月に卒業し、その年の6月に兵庫県の生活改良普及員に任命され、和田山農業改良普及センターに勤務されました。その後、但馬地区内の各普及センターで勤務され、平成11年から加西市にある兵庫県立農林水産技術総合センターで専門技術員として活躍されました。平成15年からの最後の2年間は浜坂農業改良普及センターで勤務され、平成17年3月に当センターを退職されました。現役時代のことを振り返り「専門技術員になって県内を回り、井の中の蛙の私が成長できました。生活設計、家族経営、女性の能力発揮、年金プラス農業収入100万円など、個人やグループなどに色々なことを提案した。仕事として大変苦労したが今から思うと良い人に恵まれ、良い仕事をさせていただき感謝している」と岩本さんは話されていました。当時、岩本さんが着手された事業が今では成功し、地域づくりに貢献している事例が数多くあります。

読み聞かせボランティアを結成し活動

社会貢献活動についてお聞きすると、岩本さんは学生時代に得た「本を読むことの大切さ」という教訓のもとに、12年前から小学生の保護者たちと本の読み聞かせボランティアグループ「ドロップス」を結成して、近くの市立奈佐小学校に週1回木曜日に出かけ、学年ごとに本の読み聞かせの活動をされています。読み聞かせボランティアのグループ員は13名で、読み聞かせの内容は児童たちにぜひ知ってほしい昔の出来事や学校、仕事、家庭生活、子育てなどの本からヒントを得て、それを自分なりに本を選んでいるそうです。また戦争や原爆の話、福沢諭吉の『学問のすすめ』は小学生にわかりやすくして読み聞かせをしているそうです。今後のことをお聞きすると「孫が小学校を卒業するまで本の読み聞かせボランティアをやりたい。そして小学生に読書の大切さを教えたい」と目を輝かせて話されていました。



お茶を点てておられる岩本さん

地域の高齢者が集まるサロンを

岩本さんは、茶道、俳句、習字、菓子づくりが趣味と

話されていました。茶道の流派は裏千家で現役時代から続けられており、俳句は『奈佐たしなみ句会』に10年前から加入されています。また習字は始められてから8年になるそうです。

岩本さんのご家族は、97歳のお母様、岩本さんご夫婦、息子さんご夫婦とお孫さん3人の三世代8人家族だそうです。生きがいのある人生を送るためのライフワークとして、自宅前の別棟を地域の高齢者が集まるサロンとして活用し、自分の趣味を活かした『おもてなし』をしたいと話されていました。10月19日はオープンの日であり、その準備に忙しくされていました。

岩本さんとは数年前に兵庫県の同窓会でお会いしてから久しぶりであり、話を伺っているうちに時間を忘れるほど有意義な取材でした。またご自宅は築100年以上の歴史ある立派で大きな古民家でした。岩本さん取材して印象に残ったことは、「私は読書が好きで、本に助けられてきた」と話されているほど、岩本さんは大変な読書好きの方であり、この源は学生時代の貴重な経験があったからだと話されたことです。岩本先輩、いつまでもお元気で活躍されることを祈っています。

友人と黒大豆の共同栽培を

田中 義治さん (23期卒)



今年の黒大豆は実入りが良いと田中さん

青空が広がる秋晴れの10月15日、田中義治さん(23期卒)取材するために小野市内にある畑にお伺いしました。田中さんは友人二人と畑で黒大豆の枝豆を収穫されていました。田中さんは兵庫県同窓会支部の前会長であり、久しぶりに元気なお顔を拝見いたしました。

寮長経験が卒業後に役立つ

田中さんは昭和41年に鯉淵学園(農協科)に入学されました。寮生活についてお聞きすると、「先輩達の夜の寮回りで室長がドアに鍵をかけてかばってくれた。また、水門前に集合をかけられ、説教を永遠と聞かされたことや、グラウンドを歩いていても先輩に説教され、殴られたことがあった」と懐かしく話されていました。部活

は野球部に所属し、教授から「お前は野球で卒業するのではないぞ」と言われるぐらい野球に熱中していたそうです。恩師は宮島先生で講義や実習については、あまり褒められたものではなかったそうです。しかし、「寮長をやっていたことの経験が卒業後の社会生活の支えになっている」と話されていました。

生協運動に取り組む

昭和 43 年に鯉淵学園を卒業後、灘神戸生活協同組合（現在：生活協同組合コープこうべ）に就職されました。田中さんは就職した動機を「卒業旅行で灘神戸生活協同組合を訪問して『一人は万人のために、万人は一人のために』という生協理念に心がひかれた」と話されていました。その後、生活協同組合が経営する人材育成を目的とした生協学校に入学し、業務終了後や休日を活用した大学教授や幹部職員による多彩な講義に参加するなど 1 年間終始熱心に学ばれました。生協学校の卒業時には「未来の生協の発展」というテーマの卒業論文を書かれ優秀論文賞を受賞されました。生協学校を優秀な成績で卒業された後、地域の家庭係として一軒ずつ家庭訪問する中で、組合員の求めに何ができるのかといろいろ考えさせられたそうです。その時、田中さんは「これが生協運動なのか」と自分に幾度も問いただしたそうです。また、生協から平成 7 年に勤続 30 年の感謝状を授与されたほか、入所当時から地域への貢献活動として野球に携わっていたため、生協から平成 13 年に地域スポーツ振興の功績で感謝状を授与されました。そして平成 19 年に定年を迎えられ生協運動に終止符を打たれました。

社会人野球の審判で活躍

ここで田中さんの社会人野球と審判についての経歴を紹介いたします。田中さんは鯉淵学園時代に部活で野球をされていたため、生協に就職後も社会人野球に取り組まれました。また 27 歳で野球の審判にも携わり、昭和 61 年に 2 級、平成元年に 1 級の審判資格を取得され、社会人野球における数多くの試合に審判として大変活躍されました。その活躍が評価され、平成 13 年に兵庫県軟式野球連盟から功労賞を受賞され、芦屋体育協会からは平成元年に精励賞、平成 25 年に功績賞を受けられました。芦屋野球協会と阪神軟式野球連盟からは 60 周年を記念して平成 22 年、平成 23 年に各々感謝状を授与されました。

兵庫県で 50 年ぶりの開催となった平成 18 年の第 61 回国民体育大会「のじぎく兵庫国体」には、軟式野球の派遣審判員として参加されました。現在は芦屋野球協会の副理事長、兵庫県軟式野球連盟の役員として、土・日曜日に開かれる県大会に参加しておられます。

友人と黒大豆共同栽培

田中さんは、5 年前から小野市の「ひまわりの丘公園」近くの 10a の田を友人 5 人で借りて、黒大豆の共同栽培に取り組まれています。最初は手探り状態で失敗を重ね

ながら取り組んだそうですが、今では立派な実を付け、やりがいを感じられているそうです。「田を耕し、肥料を入れ、種子を蒔き、そして補充植えをするというのが一通り作業であるが、特に夏場の草刈りが大変だ。また、6 月の種子蒔きは天候を計算しないと、10 月中旬の収穫期にはしっかりとした実が付かない」と黒大豆栽培の難しさを話されていました。



友人と黒大豆の枝豆を収穫



ちょっと腰を伸ばして

人生を豊かに過ごしたい

社会貢献活動をお聞きすると、「自治会の会長になり、自治会の道路管理、ゴミ置き場の掃除、地蔵盆準備の手助けなどを行っている。また住民の方々とコミュニケーションをはかるようにしている」と話されていました。

また、趣味やライフワークなどをお聞きすると「子供の頃から書道が好きだった。定年になりやっと時間が少しできたので、今年の 4 月から小筆を月 3 回習い始めた。昼、夜は時々カラオケに行っていて交流を深めている」と笑顔で話されていました。そして体が動く間は、土・日・祭日を利用して、芦屋野球協会の審判、県軟式野球連盟の派遣役員として人生をリッチに過ごしたいそうです。また、一年前から月曜日から金曜日の 10 時から 11 時まで、近くのプールで泳ぎとウォーキングをして楽しまれているそうです。

寮生活の復活を望みたい

最後に同窓会本部に対する意見として、「同窓会がもっと強くなり、学園側に立派な教員の補充を要請してほしい。また学園生の繋がり強化のために、寮生活の復活を望みたい」と話されていました。田中さんの後を引き継いだ私に対しても「兵庫県支部のために色々な方面に目を向け、全国に発信してくれてありがとう。今後とも

よろしく頼む」と激励のお言葉をかけていただきました。取材が終わった帰り際に、田中さんから収穫したばかりの新鮮な黒大豆を枝ごと頂きました。帰宅してすぐに茹でて食べると甘くて美味しかったです。田中先輩、いつまでもお元気で活躍されることを祈っています。

地域の活性化に貢献

関口 恵士さん(25 期卒)



良く実った黒大豆畑を背景に関口さん

10月17日、京都府に通じる国道372号線の沿道に立ち並ぶ「丹波特産の黒大豆枝豆」と書かれた幟や販売テントの多さに驚きながら篠山市西野々にお住いの関口恵士さん(25期卒)をお訪ねいたしました。ちょうど収穫した黒大豆の枝豆を出荷する作業の最中で大変忙しそうに働いておられました。しばらくの間、手を休め取材に応じていただきました。

楽しかった寮生活

関口さんは地元の高校を卒業後、昭和43年に鯉淵学園(農協科)に入学されました。学生時代の思い出をお聞きますと、「東寮と西寮に入っていたが楽しい寮生活であった。正座をさせられて痛かったことや洗面器でラーメンを作ったことがある。冬休みには故郷に帰らず友人宅に行きスキーをして遊んだ。部活ではサッカー部に入って活動していた。自治会活動では栄養部に所属していた」と懐かしそうに話されていました。恩師は農協科の宮島三男先生のほか、白田先生、砂田先生、高橋先生などの名前をあげられました。

篠山町庁舎建設には大変な苦勞があった

昭和45年に鯉淵学園を卒業され、地元の多紀町役場に就職されました。最初は議会事務局に配属され、その後総務課、土木課に移り、土木事業のほか災害復興や林地災害などを担当されました。昭和50年に多紀郡内の三町(多紀町、城東町、篠山町)が合併して篠山町が誕生しました。その篠山町では建設課、総務課、管財課を経たあと、企画課の時に篠山町(現篠山市)の庁舎建設

や国立篠山病院を兵庫医科大学へ移譲する業務を担当されたそうです。その後、町づくり課では市民センター建設を担当され、最後は産業経済部長として退職されました。公務員時代の仕事で印象に残っていることをお聞きしますと「篠山町の庁舎建設には大変な苦勞があった。この時のことが最も印象深い」と当時を振り返りながら話されていました。

『一集落一ファーム』を目標に

関口さんは、篠山市を退職後、農業に従事されました。今では田(137a)を水稻(98a)、黒大豆(24a)、小豆(5a)、自家野菜(5a)の栽培と育苗ハウス(5a)などで活用されているほか、畑(7a)は自家野菜などを栽培されています。収穫した黒大豆の枝豆は、農協、農産物直売所、会社、個人に出荷されているそうです。

また、農業に取り組みながら地元集落の自治会長を4回(4期8年)就任され、集落活動の活性化にも尽力されました。特に将来を見据えた集落営農プランを作成し西野々営農組合を結成されました。営農組合は組合員22名で組織し、2haをオペレーター3名が田植えから収穫までの受託作業をしておられます。また受託田25aにおいては協働で黒大豆の栽培に取り組んでおられます。関口さんはその営農組合の組合長として活躍されていますが、「中心になって働くオペレーターが高齢であり、代わるべき担い手が見つからない。また少子高齢化と後継者不足の地域で農地を農地として保全するにはどうしていけばいいのか不安である。個人での保全は限界にきている」と深刻な表情で話されていました。

今後の集落営農の方向について関口さんは、「集落営農の組織化を目指したこともあり、組織化当初から目標として考えていることは共同と協働による『一集落一ファーム』である」と将来のビジョンを話されていました。



黒大豆枝豆とそのレシピ



作業中の関口さん

福住地区の活性化に貢献

関口さんは社会貢献活動として、福住地区まちづくり協議会に参加され、田舎暮らし体験住宅運営委員会の事務局長、福の里農業小学校の事務局長に就任し活躍されています。田舎暮らし体験住宅は、兵庫県のモデル事業で、田舎暮らしを希望する都市住民を地域の空き家に1か月間集落の一員として生活し、農業体験や篠山暮らし見聞ツアーなどに参加して、集落活動の良さを実感してもらう取り組みだそうです。平成25年3月に開設されましたが、現在まで延べ24組の家族が利用し、篠山市と隣接市を含めて7組が定住されています。

また福の里農業小学校は、大阪、京都、神戸や地元の小学生とその家族を対象にして、農業や食べ物の大切さを学び、そして都市との交流、世代間のふれあい、ひいては農都篠山市、福住の活性化に結びつけるという取り組みだそうです。関口さんは福の里農業小学校について「農の体験を通して農業に対する理解と将来における支援者になりえる子供たちを育てている。そのことが中山間地における農地の保全に繋がっていくと思い取り組んでいる」と力を込めて話されていました。

そのほか、農産物直売所の役員、社会福祉協議会の理事、財産管理組合の副理事長などを務められ、福住地区の活性化に貢献されておられます。関口さんは、「農業に従事しながら地域社会に貢献させてもらうことは自分のためであると思っている」と笑顔で話されていました。



農業小学校で野菜の栽培方法を聞く子供たち

同窓生の実践力を学べ

趣味は海釣りだそうです。「瀬戸内海や日本海に魚釣りに行きたいが、忙しくてなかなか行けない」と話されていました。

最後に関口さんは「当時の学園は全寮制で、全国各地から学生が在学していた。正月は帰省せず友達の家で新年を迎えさせていただいたこともあり、今では良い思い出となっている。幸いにも全国各地に多方面で活躍されている先輩方が多くおられるので、気軽に訪ねてその実践力を大いに学ぶのもいいのではないかと学園生や同窓会の後輩に激励の言葉をいただきました。

取材が終わり帰り際に、「遠いところ来てくれてありがとう。丹波特産の黒大豆枝豆を持って帰って」と言われ黒大豆枝豆を頂いて帰りました。その日の夕食は、関

口さんが作成された黒大豆枝豆料理のレシピを使って、女房が「枝豆ごはん」を作ってくれました。とても美味しく頂きました。関口先輩、いつまでもお元気で活躍されることを祈っています。

同期会情報

モデル農協の仲間が高松で集う



再会を誓い宿泊所の前で記念撮影

(左から、福岡県：三島守人、香川県：山花健二、島根県：山田順一、山形県：白田 順、香川県：林 道夫、兵庫県：福井寛行)

45年ぶりの再会

「お爺さんになったな」「お前太ったな、幸せ太りと違うか」「お前こそ、痩せて病気で違うか」「髪の毛が白くなって、禿げてるやないか」と遠慮のない会話が飛び交いました。鯉淵学園（農協科）最後のモデル農協簿記実習の仲間（26期卒）6人が45年ぶりに平成28年5月23日、24日に香川県高松市の「天然温泉きらら」に集りました。

モデル農協は栄光農協

卒業後、就農したり、農協・行政・会社関係に就職するなど、それぞれが歩んだ道は異なっていましたが、学生時代に同じ釜の飯を食べ、モデル農協（名称は栄光農協）の組合長や職員として、取引の起票から決算、経営分析、業務報告書の作成までを切磋琢磨して取り組んだ仲間意識はしっかりと残っていて、学生時代に戻ったような気分になりました。

厳しくも楽しい寮生活

夏期休暇の前に必ず行われる炎天下での実習や夜間での洗面器ラーメン、寮長室で正座させられての説教、声がかかるまで延々と続く寮歌斉唱などは、メンバー全員が鮮明に記憶していました。土曜日に開かれる食堂でのダンスの会で可愛い女子学生を取りあったこともありました。

忘れられない卒業旅行と特研旅行

就職が決まり卒業式を2ヶ月後に控えた冬のある日、卒業旅行と称して、同じモデル農協のメンバーがレンタカーを借り、伊豆半島を巡る旅に出ました。しかし、定員オーバーの6人が乗ったため、交代して車のトランクに身を隠して旅を続け、途中のミカン山で熟した美味しいミカンを失敬したこともありました。特研旅行では、茨城県玉川農協、兵庫県北阿万農協、生活協同組合コープこうべなどを視察し、先進事例を学びました。45年前の学生時代に戻り、その当時の懐かしい出来事について酒を酌み交わしながら夜遅くまで賑やかに語り合いました。



高松市内の居酒屋で盛り上がる



疲れたので栗林公園でひと休み

記憶に残る宮島先生の一言

やはり農協科の講義で思い出すのは、恩師宮島先生が顔を真っ赤にして、手をこすりながら我々学生を説教する姿であります。黙って聞いている我々学生に対して、宮島先生は「君たちに言っておきたいことは『はじめに農協ありき』でなく、『はじめに農民ありき』であることを絶対に忘れないように」と強く言われたことを今でも記憶に残っています。宮島先生の助手であり、農協簿記の実習指導を担当されていた前田先生は、我々学生と年齢が近かったこともあってか、学生の身になって難しい簿記実務を丁寧に教えていただいたことを思い出します。宮島先生からの教えが県農協中央会に就職してからも大変役立ったと思います。

シニアの問題を語る

集いの最後にはシニア世代の話題といえる老後の暮らし、少ない年金、健康問題などセカンドライフで盛り上がり、定年退職後に農業を営んでいる者が農業の楽し

さや年収を自慢したり、不動産業を営んでいる者は土地、建物取引の難しさを説明したりと話題は尽きることなく続きました。翌日は全員で国の特別名勝に指定され、日本庭園で有名な栗林公園に行ったあと、名物の讃岐うどんを昼食に食べました。

次回は島根県で

このモデル農協の集いは、毎年持ち回りで開くことになり、次回は平成29年5月頃に島根県で集まることになりました。なお、今回病気で不参加の長崎県前田和海さんは10月17日に逝去されたとの訃報が入りました。次回に会えることを楽しみにしていたのですが、本当に残念です。心よりご冥福をお祈りします。

(福井 寛行 26期卒)

井口さんが総務大臣賞を受賞

篠山市小原にお住まいの井口成子さん(23期卒)は10月7日、東京都内で開かれた行政相談委員総務大臣表彰式に出席され、「総務大臣賞」を受賞されました。井口さんは平成17年から行政相談委員として長年活躍され、その活動が総務省から評価されたもので、「これからも今まで以上に市民と行政のパイプ役として頑張っていきたい」と抱負を述べられました。

なお、行政相談委員(全国で約5,000人)は、行政相談委員法に基づき、総務大臣が委嘱し、全国の市(区)町村に設置される役職です。行政相談委員の活動は、国民が暮らしの中で感じている国の行政サービスに関する苦情や行政の仕組みや手続きに関する問い合わせなどの相談を受け付け、その解決のための助言や関係行政機関に対する通知などの仕事を無報酬で行います。井口先輩、おめでとうございます。これからも頑張ってください。



表彰状を手に井口さん



表彰式会場で記念撮影

鯉淵学園ニュース

厳しい学生応募状況

東京農業大学と連携協定を締結

鯉淵学園と東京農業大学は、それぞれ次世代を担う農業人材の育成に努めるため、両校の教育資源を生かした協力関係の構築を検討してきました。

このほど検討内容がまとめられ、10月17日（月）に東京農業大学において「鯉淵学園農業栄養専門学校と東京農業大学との農業人材育成に係る包括連携協定」を締結しました。本校からは須田理事長、近藤学園長らが、東京農業大学からは大澤理事長、高野学長らが出席しました。

今後はこの包括提携により、両校は相互に連携・協力をとりながら、(1)農業人材育成、(2)教育・学術交流、(3)就職支援、(4)農林水産業振興などについて進めることとなりました。



(この記事は鯉淵学園同窓会本部からの情報提供によるものです)

鯉淵学園と同窓会本部からの情報によると、平成29年度の入学希望者は定員を下回り、学園改革が計画どおりに進まない厳しい状況下にあります。本県支部に対しても学生募集支援依頼があり、地元高校などに問い合わせるなど入学依頼をしていますが、生徒の大学志望や将来の進路など色々な理由で難しい状況です。支部会員の皆様も推薦、紹介などお力添いをいただきますようお願いいたします。

兵庫県支部会費納入者

平成28年6月9日から平成28年11月30日の期間で兵庫県支部会費を納入された会員のみ入金順に掲載しました。ご協力ありがとうございました。(敬称略)

岩本佐知子 20 期卒、普光江文江 12 期卒、大林幸子 25 期卒、岸根秀明 36 期卒、木村毅司 33 期卒、前田豊明 28 期卒、加藤 整 10 期卒、加藤定子 11 期卒、奥山隆治 4 期卒、辻 伴子 27 期卒、田中義治 23 期卒、中野圭治 53 期卒、高見康彦 44 期卒、西 三千穂 30 期卒、福井寛行 26 期卒、出店利彦 19 期卒、小島好文 11 期卒、橋本 篤 31 期卒、長峰年正 19 期卒、近本昌博 43 期卒、中嶋則子 15 期卒、柴垣仁司 20 期卒、関口恵士 25 期卒、西田 博 25 期卒、北垣裕之 42 期卒、長尾輝夫 24 期卒、岡本昭治 31 期卒、岡本多恵子 31 期卒、孝橋利己 25 期卒、奥田和夫 10 期卒、奥田孝枝 14 期卒、戸田寮一 23 期卒、谷口耕一 25 期卒、堀端俊造 3 期卒、武久正篤 28 期卒、田中智巳 36 期卒、山本篤良 26 期卒、鞍田三穂 13 期卒、高田修身 15 期卒、吉川千鶴子 24 期卒、三宅栄史 21 期卒、井口成子 23 期卒、正木浩二 2 期卒、富垣淳生 16 期卒、小森英逸 31 期卒、西浦英子 24 期卒、芦田靖司 44 期卒、高木経吉 22 期卒

訃報

成定良一さん（4期卒）が平成27年10月3日に逝去されました。慎んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記（平成28年12月）

私事ですが今年も運良く抽選に当たり、10月30日、大阪マラソンに参加しました。秋の浪速の街を走りきり、とても疲れましたが最高の気分でした。

同窓生の皆さん、支部だよりを充実するために、今後とも同窓生の情報や執筆・取材の協力・意見・感想をお寄せください。住所、電話番号、職業等の変更があれば必ずお知らせください。

編集者：福井寛行（26期卒）

〒677-0038 兵庫県西脇市大垣内44-2

TEL(FAX)0795-22-1815 携帯090-1022-2672

E-mail: hirokei-677@hera.eonet.ocn.ne.jp